

## 創世記9章18節－10章「民族分布」

### 1A カナンへの呪い 18－29

#### 2A ノアの息子 10

1B ヤペテ 1－5

2B ハム 6－20

3B セム 21－32

## 本文

創世記9章18節を開いてください。私たちは、前回、ノアが箱舟から出てきて、神が彼を通して、人と動物と契約を結んでくださったところを読みました。今日は、その続きです。

### 1A カナンへの呪い 18－29

9:18 箱舟から出て来たノアの息子たちは、セム、ハム、ヤペテであった。ハムはカナンの父である。9:19 この三人がノアの息子で、彼らから全世界の民は分かれ出た。

私たちはアダムの子と言うこともできますが、ノアの子孫と言うこともできます。他の子孫は全て滅び、ノアの家族だけが残りました。そこで、改めてノアから出てきた子孫を著者モーセは書いています。けれどもここにあるように、私たちは様々な民族や国語や国々に分かれています。この経緯、民族の誕生を私たちはこれから読んでいきます。

三人の息子、セム、ハム、ヤペテをノアは生んでいましたが、その中のハムについて「カナンの父である」と追加しています。カナン人ということ、これからモーセは意識します。なぜなら、イスラエルの父祖アブラハムは、約束としてカナンの地に入るのであり、そしてヨシュアたちが、カナン人を追い出してその地に住みつくようになるからです。

9:20 さて、ノアは、ぶどう畑を作り始めた農夫であった。9:21 ノアはぶどう酒を飲んで酔い、天幕の中で裸になっていた。

ここを読むたびに、私たちは驚きます。あの正しい人で、全き人と呼ばれたノアが、泥酔して裸になっているのです。聖書は徹底的に、完璧な人などいないことをはっきり表しています。全ての人々が罪を犯し、誰一人として義人はいないことを教えています。ノアもそうでした。彼が義と認められたのは、信仰によるのであり、その行ないではなかったことをヘブル書の著者は記しています。「ヘブル 11:7 信仰によって、ノアは、まだ見ていない事ながらについて神から警告を受けたとき、恐れかしこんで、その家族の救いのために箱舟を造り、その箱舟によって、世の罪を定め、信仰による義を相続する者となりました。」

お酒を飲むことについてですが、聖書ではっきりしているのは、泥酔は肉の行ないであり、罪であるということです。「肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。(ガラテヤ 5:19-21)」

日本は泥酔している人たちにあまりにも寛容です。けれども、ノアが裸になって愚かさを表したように、泥酔している人々はその愚かさを表します。街角で、突然、人に殴られたという女性の人たちの実際の話を聞いたことがあります。それを「酔っていて何も覚えていない。」と言い訳します。そしてお酒のせいでどれだけ家庭で暴力が増え、妻また子供が被害を受けています。けれども、文化や世間はそれに対して寛容であろうとします。けれども、明らかに罰せられるべき罪です。

9:22 カナンの父ハムは、父の裸を見て、外にいるふたりの兄弟に告げた。9:23 それでセムとヤペテは着物を取って、自分たちふたりの肩に掛け、うしろ向きに歩いて行って、父の裸をおおった。彼らは顔をそむけて、父の裸を見なかった。9:24 ノアが酔いからさめ、末の息子が自分にしたことを知って、9:25 言った。「のろわれよ。カナン。兄弟たちのしもべらのしもべとなれ。」9:26 また言った。「ほめたたえよ。セムの神、主を。カナンは彼らのしもべとなれ。9:27 神がヤペテを広げ、セムの天幕に住ませるように。カナンは彼らのしもべとなれ。」

この箇所は、表面的に読むと、ノアが頭に来て、それでハムを呪ったように見えます。けれども、そういうものではありません。著者モーセは、注意深く、ハムではなく、その子カナンが呪われていることを書き記しています。ハムが行なったことは、彼の子カナンの子孫であるカナン人が後に行なうことを、予め示していたからです。

ハムと、他の二人の兄の違いは何でしたでしょうか？カナンは父の裸を見ましたが、セムとヤペテは、顔を背けて父の裸を見ませんでした。見たか、見なかったかの違いです。けれども、この「見る」のヘブル語の動詞は「じっくりと見る」という意味合いがあります。つまり、ハムはただ父が裸なのが見えたのではなく、じっくりと見ていたのです。

彼のその態度は、「あざけり」と「見下し」です。また、性的な興味ももしやあったかもしれません。父の権威に対する反抗です。それを発展させて、神の権威に対する反抗やあざけり、そして墮落していく姿をカナン人が見せていきます。カナン人の中には、ソドムとゴモラの住民もいます。男性に満ちあふれていた町ですね。最終的に、モーセの後継者であるヨシュアが、神が約束してくださった土地に入るときに、神はこれらカナン人をことごとく滅ぼしなさいとイスラエルに命じられました。

その後、イスラエルはカナン人を完全に追い出さなかったが、その子孫が確かに、「しもべらのしもべ」とノアが言ったように、奴隷としての使役を受けることになることが書かれています。ソロ

モンの時代のことです。「1列王 9:20-21 イスラエル人でないエモリ人、ヘテ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の生き残りの民全員。すなわち、イスラエル人が聖絶することのできなかつた人々の跡を継いで、この地に生き残った彼らの子孫を、ソロモンは奴隷の苦役に徴用した。今日もそうである。」

セムに対しては、「セムの神、主を。」と言ってノアはほめたたえています。これは預言の言葉であり、セムから出てくるイスラエル人からメシヤ、キリストが出てくるからです。そしてヤペテについては、「ヤペテを広げ、セムの天幕に住まわせるように。」と言っていますが、ヤペテの子孫の広がりは 10 章の初めに出てきます。広範囲に広がるのです。けれども、靈的にはセムの影響下に入ります。ヤペテはロシア南部からトルコ、そしてヨーロッパに至る諸民族です。そこにイエスを信じるユダヤ人が宣教に行き、ユダヤ人のメシヤを信じていくようになるのです。

9:28 ノアは大洪水の後、三百五十年生きた。9:29 ノアの一生は九百五十年であった。こうして彼は死んだ。

これでノアの生涯が終わります。アダムよりも二十年長く、生きています。しかし、その最後の三百五十年は初めの信仰による六百年に比べますと、劣ってしまいます。もちろん、ノアは信仰によって報いを受けているのですが、最後まで走るということが、神の憐れみに拠らなければできないのだということを教えられます。

## **2A ノアの息子 10**

### **1B ヤペテ 1-5**

10:1 これはノアの息子、セム、ハム、ヤペテの歴史である。大洪水の後に、彼らに子どもが生まれた。

10 章はノアの系図というよりも、民族の分布図になります。聖書を信じる人たちだけでなく、一般の民族の分類においてもこの箇所を多くの人々が用います。それだけ、歴史上に出てくる民族に、深く関わりのある名前が出てきます。

10:2 ヤペテの子孫はゴメル、マゴグ、マダイ、ヤワン、トバル、メシェク、ティラス。10:3 ゴメルの子孫はアシュケナズ、リファテ、トガルマ。10:4 ヤワンの子孫はエリシャ、タルシシュ、キティム人、ドダニム人。10:5 これらから海沿いの国々が分かれ出て、その地方により、氏族ごとに、それぞれ国々の国語があった。

初めに、ヤペテの子孫です。彼から出てくるのは、「ゴメル、マゴグ、マダイ、ヤワン、トバル、メシェク、ティラス」これらは黒海とカスピ海の辺りから小アジア(今のトルコ)に至るところに住んでいた人々です。エゼキエル書 38 章の、イスラエルを一斉に攻める国々の大首長は、「メシェクとトバ

ルの大首長であるマゴグの地のゴグ(2 節)」とあります。同じくゴメルの子孫のアシュケナズ、リファテ、トガルマもその地域に分布しました。そして、そしてヤワンの子孫で「エリシャ、タルシシュ、キティム人、ドダニム人」とありますが、ヨーロッパ南部、地中海沿いのところいた民族です。タルシシュはスペインにおり、イスラエルにとって地の果てのところとしてしばしば聖書に登場します。有名なのはヨナ書で、預言者ヨナがヨッパからタルシシュ行きの船に乗りました。ですから、「神がヤペテを広げ」という言葉が成就しました。

## 2B ハム 6-20

10:6 ハムの子孫はクシュ、ミツライム、プテ、カナン。10:7 クシュの子孫はセバ、ハビラ、サブタ、ラマ、サブテカ。ラマの子孫はシェバ、デダン。

ハムの子孫は、主に北アフリカに位置します。「クシュ」はエチオピアのことで、今のエチオピアだけでなく、スーダン、そしてエジプトの南部にまで広がった国です。そして「ミツライム」は、エジプトのことです。エジプトにいくと、今でもミツライムの名を使った名称が数多く出てきます。そして「プテ」は、今のリビアにあっただろうと言われています。ソマリアだという人もいます。

そしてクシュの子孫は主にアラビア半島南部にいました。特に「シェバ、デダン」は、ソロモンに表敬訪問した「シェバの女王」で有名ですね。現在のサウジアラビアです。

10:8 クシュはニムロデを生んだ。ニムロデは地上で最初の権力者となった。10:9 彼は主のおかげで、力ある猟師になったので、「主のおかげで、力ある猟師ニムロデのようだ。」と言われるようになった。10:10 彼の王国の初めは、バベル、エルク、アカデであって、みな、シヌアルの地にあった。10:11 その地から彼は、アシュルに進出し、ニネベ、レホボテ・イル、ケラフ、10:12 およびニネベとケラフとの間のレセンを建てた。それは大きな町であった。

10 章は、「ニムロデ」という人物に注目しています。彼が、11 章に出てくるバベルの塔を建てるのに大きな役割を演じた人であろうと考えられます。彼の王国に「バベル」があり、そして「シヌアルの地にあった」とあります。そして後にここからバビロンが登場します。そしてその後に「アシュル」に行ったとありますが、これは古代アッシリヤのことであり、イラク北部にあるところです。ここに、後にイスラエルの民が北イスラエルはアッシリヤ捕囚、南ユダがバビロン捕囚に遭うことの種が植えられます。

彼は神なる主の権威に反抗した者でした。「主のおかげで、力ある猟師」とありますが、これは否定的な意味で使われています。「主の前で力ある猟師」と訳したほうがよいでしょう。「ニムロデ」という言葉そのものが「反抗」という意味だからです。ニムロデには神に対する権威を侮り、見下す態度がありました。そして彼は猟師でありましたが、単に動物の猟だけでなく、人の魂の猟をする者になりました。権力者となり、人々を次々と蹂躪していったのです。

預言者ミカが、後にニムロデの事を言及します。「彼らはアッシリヤの地を剣で、ニムロデの地を抜き身の剣で飼いなす。(5:6)」これは、その前に出てくる「ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。(2 節)」という預言の続きです。ベツレヘムの町から、家畜小屋でマリヤからお生まれになったイエス・キリストが、後にアッシリヤ、そしてニムロデの地を抜き身の剣で飼いなす、とミカは預言したのです。

主イエス・キリストが行なわれたことは、この世の最も強大な権力者でさえ打ち勝つことのできないことを行なわれました。それは死からの復活です。罪から死が入ってきました。この罪そのものを打ち滅ぼしてくださったのです。そして主イエス・キリストはこの世界に再び戻ってこられます。そして、神に反抗するすべての者たちに対して、また世界の王たちに対して戦われ、これらを打ち殺し、平和に満ちた神の国を打ち立ててくださるのです。

10:13 ミツライムはルデ人、アナミム人、レハビム人、ナフトヒム人、10:14 パテロス人、カスルヒム人…これからペリシテ人が出た…、カフトル人を生んだ。

地中海の島々の民族ですが、「ペリシテ人」という聖書の中で有名な民族が出てきました。彼らは地中海に浮かぶクレテ島から来た民族で、地中海の沿岸、イスラエルの南部に五つの町を立て、そして紀元前 1400 年辺りからイスラエルの地に侵入してはイスラエル人を苦しめていた民族です。

10:15 カナンは長子シドン、ヘテ、10:16 エブス人、エモリ人、ギルガシ人、10:17 ヒビ人、アルキ人、シニ人、10:18 アルワデ人、ツェマリ人、ハマテ人を生んだ。その後、カナン人の諸氏族が分かれ出た。

ここに、ヨシュアたちが約束の地に入った時に、神からことごとく滅ぼせと命じられた民族が並んでいます。彼らを理由なく殺しなさいと神は命じられたわけではありません。彼らの悪があまりにも酷かったために、もしそのままにしていたら彼ら自身で自分たちを滅ぼしていったことでしょう。淫らなことをして、それで出てきた幼児を偶像のいけにえとして捧げました。後に、イスラエル人がその慣わしの影響を受けて彼ら自身が行なってしまったために、エルサレムが滅ぼされるという裁きを受けました。ですから、「のろわれよ。カナン。(9:25)」というのは、それゆえの神の警告だったのです。

しかし、ここで大切なのは、福音というのは、呪われた者たちをも救う神の力です。カナン人だけでなく、私たちはみな、罪によって神に呪われた者たちです。ですから、カナン人だけが呪われているのではなく、我々人間はみな、呪われています。イエス様と弟子たちが、ツロとシドンに行かれた時のことです。そこは今のレバノン、歴史的には「フェニキヤ人」の住んでいたところで、フェニ

キヤ人はカナン人の一部とみなされています。そこで、一人の女がやってきました。「すると、その地方のカナン人の女が出て来て、叫び声をあげて言った。「主よ。ダビデの子よ。私をあわれんでください。娘が、ひどく悪霊に取りつかれているのです。」(マルコ 15:22)」そしてこの女は、その信仰によって救われました。

10:19 それでカナン人の領土は、シドンからゲラルに向かってガザに至り、ソドム、ゴモラ、アデマ、ツェボイムに向かってレシヤにまで及んだ。10:20 以上が、その氏族、その国語ごとに、その地方、その国により示したハムの子孫である。

「シドンからゲラル」とありますが、これはレバノンにあるシドンから、イスラエル南部の地中海沿いにある町であるゲラルのことです。つまり、今のイスラエル全域に住んでいた人々でした。それだけでなく、死海のところにもカナン人はいて、「ソドム、ゴモラ」があります。彼らも、その邪悪さのゆえに神の裁きを受けます。

そして、ヤペテの子孫にも、ハムの子孫にも「分かれ出た」という言葉がありますね。5 節、そして 18 節です。セムの子孫にも 25 節に出てきます。なぜノアの家族は一つの民、一つの言葉だったのにこのように分かれ出たのか、という経緯が 11 章のバベルの塔に出てくる話しなのです。

### 3B セム 21-32

10:21 セムにも子が生まれた。セムはエベルのすべての子孫の先祖であって、ヤペテの兄であった。

セムが、「エベル」の先祖であることが強調されています。この言葉から派生して「ヘブル人」と呼ばれます。ヘブル人はイスラエル人であり、そしてユダヤ人です。みな同じ人々のことです。」そして「エベル」の名前の元々の意味は、「越える」です。初めのヘブル人であるアブラハムは、偶像礼拝の町から、神に呼び出されて出て行き、そしてユーフラテス川を渡ってカナン人の地に行きました。つまり、偶像の生活から決別し、天地を造られた生ける神に従うという意味合いが、この名前に含まれているのです。

10:22 セムの子孫はエラム、アシュル、アルパクシャデ、ルデ、アラム。

エラムは後にペルシヤの国になるところで、今のイランです。アシュルは、先ほど話しましたようにイラク北部です。そしてアラムは、シリアの古代名です。これも創世記からずっと出てくる国です。

10:23 アラムの子孫はウツ、フル、ゲテル、マシュ。10:24 アルパクシャデはシェラフを生み、シェラフはエベルを生んだ。10:25 エベルにはふたりの男の子が生まれ、ひとりの名はペレグであった。彼の時代に地が分けられたからである。もうひとりの兄弟の名はヨクタンであった。

「ペレグ」というのは「分かれる」という意味があります。「地が分けられた」とありますが、これを「大陸移動」と見る人たちもいます。地は一つであったが、ペレグの時に、例えばアメリカ大陸とアフリカ大陸が分かれ、アフリカ大陸と、インドのユーフレテス大陸が分かれた、というように、です。あるいは、もっと単純に先ほどから見ているように、言葉が分かれたことによって、民族がそれぞれの地域に分かれていった、と読むことができます。そう読むならば、ペレグの時代に次の章のバベルの塔の事件が起こったと考えられます。

そして、11章において、このペレグからアブラハムまでの系図があります。ペレグから、後にイエス・キリストにつながります(ルカ 3:35)。

10:26 ヨクタンは、アルモダデ、シェレフ、ハツアルマベテ、エラフ、10:27 ハドラム、ウザル、ディクラ、10:28 オバル、アビマエル、シェバ、10:29 オフィル、ハビラ、ヨバブを生んだ。これらはみな、ヨクタンの子孫であった。

「オフィル」というのは、アラビア半島の南のところにありますが、金が採掘される場所として聖書に出てきます。そして「ヨバブ」を、ヨブ記の「ヨブ」ではないかと言う人たちもいます。そうでなくても、ヨブ記はモーセが創世記を書いた時よりも前に書き記されたのではないかとされています。モーセが紀元前 1440 年頃、創世記から申命記を書き記したのですが、ヨブはおそらくアブラハム、イサク、ヤコブの生きていた族長時代に生きていました。

10:30 彼らの定住地は、メシャからセファルに及ぶ東の高原地帯であった。

主にサウジアラビアの地域です。ですから、彼らはアラビア人となっていきます。

10:31 以上は、それぞれ氏族、国語、地方、国ごとに示したセムの子孫である。10:32 以上が、その国々にいる、ノアの子孫の諸氏族の家系である。大洪水の後にこれらから、諸国の民が地上に分かれ出たのであった。

何度も強調していますね、「諸国の民が地上に分かれ出たのであった」と言っています。それが11章です。

ノアによって新しい世界、新しい生活が始まったのに、しかし人間が失敗して、こんどは分かれ出ていったという結果になります。そして民族に分かれ、言語が分かれますが、その中で主はなおのこと、ご自分の民を造ることによってこの世を贖おうとしていきます。それは次回、見ていきましょう。